

秋山 文生(あきやま・ふみお)

1、プロフィール

詩人。東奥義塾在学中、詩人福士幸次郎の指導を受けた同人誌「わらはど」に参加。戦前は「鴉」「座標」「聯」に作品を発表した。戦後は「壺年」「北」「偽画」などに発表した。

<生没>

1910(明治 43)年 12 月 18 日 ~ 1981(昭和 56)年 7 月 4 日

<代表作>

「秋山文生」(『青森県詩集』下巻 昭和 50 年8月)

<青森との関わり>

弘前市大字外崎(旧豊田村)に生まれ、東奥義塾入学。「わらはど」に参加。青森銀行に勤務する。県内詩誌に多くの作品を発表した。

2、作家解説

明治 43 年 12 月 18 日、弘前市大字外崎字村元 200 番地(旧豊田村)に、父保三、母きさの四男として生まれた。上三人は生まれて育たなかった。下に妹二人がいる。本名柳田英二。父は、柳矢と号し荻原井泉水門下の俳人として明治大正昭和の三代に亘って活躍した。叔父に、明治文学研究者柳田泉がいる。大正 14 年5月、東奥義塾三年生の時、今官一、三上斎太郎らが同人誌「わらはど」を詩人福士幸次郎の指導の下で創刊するに際して同人として参加する。

昭和2年、早稲田大学に進学する。ドイツ文学専攻。卒業までに病気で二度休学している。昭和 10 年に同大学を卒業したのち、慶応義塾大学に聴講生として籍を置いた。昭和 11 年に帰郷。翌年第五十九銀行(現青森銀行)に入行した。父が長く務めていた銀行であった。

この間、昭和2年6月、「鴉」創刊号に「冬の夜と部屋に閉ぢこもる私の感傷」、昭和6年1月「座標」に短詩7編を載せた。これらは柳田英二の本名で発表された。帰郷まもなく小枝九郎らと弘前詩話会を結成。船水清、植木曜介らの影響を受け

た。また、一戸謙三、高木恭造らが属する新定型詩誌「聯」に昭和 13 年から「秋の身」「年」「日」などを秋山文生のペンネームで発表した。

戦後、一戸謙三、植木曜介とともに「壺年」を創刊したのは昭和 21 年6月のことであった。これには「悲哀の下を」「花」「盲目の乞食女」「愛よ、その傷口から…」等を発表する。23 年6月に創刊された第三次「北」には発起人の一人として名を連ね、「女たちの手」を載せる。「浮彫」(「青森美術」改題)には「巨樹」「灯台」を発表する。

自選「秋山文生」(『青森県詩集』下巻)の 31 編の詩は、青森銀行従業員組合「新鉞脈」や風の木社「偽画」、大阪高松書店「蝶」、藤田勇三郎「鱗」などに発表したものである。

秋山文生に詩集はない。

昭和 56 年7月4日、自宅で 70 歳の生涯を終えた。